



**Data**

監督・脚本: サミュエル・マオズ  
 出演: リオール・アシュケナージ  
 / サラ・アドラー/ ヨナタン・シライ/ ゲフェン・バルカイ/ デケル・アディン/ シヤウル・アミール/ イタイ・エクスロード/ ダニー・イツセルレス/ イタマル・ロッチルド/ ロイ・ミレル/ アリエ・シェルネル/ ユダ・アルマゴル/ シラ・ハース/ カリン・ウゴウスキー

## 👁️👁️ みどころ

アカデミー賞と違って、カンヌ、ベネチア、ベルリンの受賞作は名作ぞろいだが、難解なのが玉にキズ・・・？『レバノン』（10年）での金獅子賞に続いて、ベネチアで銀獅子賞（審査員グランプリ）を受賞したサミュエル・マオズ監督の本作も名作だが、難解。邦題の「運命は踊る」とは？また、原題の「フォックストロット」とは？

“誤報”は嫌だが、息子の戦死が誤報だったとすれば、両親は嬉しいはず。ところが、この父親は・・・？「運命は踊る」とは、音と映像を見事に調和させた名作『會議は踊る』（31年）と同じく意味シンだが、さて、“ギリシャ神話”模様のその展開は？張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『活きる』（94年）は、わかりやすく感動的な映画だったが・・・？

イスラエルは徴兵制の国、そして戦争が日常の国。対して日本は？そんな幸せを享受できるのはありがたいが、日本の若者たちは本作を如何に・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□このイスラエルの監督に注目！タイトルの意味は？■□

本作は、デビュー作『レバノン』（10年）で第66回ベネチア国際映画祭金獅子賞を受賞したイスラエルのサミュエル・マオズ監督の8年ぶりの作品だが、本作も第74回ベネチア国際映画祭で銀獅子賞（審査員グランプリ）を受賞したというから、こりゃ必見！もっとも、本作の原題は「フォックストロット」で、これは、あるダンスのステップのことらしい。その意味は「前へ、前へ、右へ、ストップ。後ろ、後ろ、左へ、ストップ」。つまり、元の場所に戻ってくるのが「フォックストロット」のステップらしい。スクリーン上

では、国境警備の任務に就いている若きイスラエル軍兵士ヨナタン（ヨナタン・シライ）が、銃を手に華麗なフォックストロットのステップを踏むシーンも登場するが、さてその意味は・・・？

## ■□■ “嬉しい誤報”のはずだが、この父親は？ ■□■

平和で安全な日本と違って、1949年の建国以降ずっと何らかの戦争が続いているイスラエルは徴兵制の国で、18歳以上の男女にはすべて兵役の義務がある。もっとも、ヨナタンが仲間と共に赴任しているのは国境警備の簡単な任務（？）だから、戦死のリスクは全くなし・・・？そんな息子の兵役の実態を父親のミハエルや母親のダフナが知っているのか否かは別として、本作はこの両親の下に息子ヨナタンの戦死の報告が届くところからスタートする。戦時中の日本ではよくあったはずの風景で、そんな時、日本では天皇陛下のために息子が名誉の戦死を遂げたことを喜んだはずだが、さてイスラエルでは・・・？この父親は？母親は？

本作は“ギリシャ悲劇”のような3部構成になっているが、ハッキリ言ってその後に展開される葬儀等を巡る両親やその親族たちのドラマは少し退屈。もっとも、葬儀の準備をしていく中でミハエルの頭の中に浮かび上がってくる疑問は、ヨナタンはどこで、どんな状況下で戦死したの？ヨナタンの遺体はどこにあるの？等だが、軍からはそれに対する回答は全くなしだ。戦時中の日本では、戦死した息子の父親が軍に対してそんな情報を要求することはありえないが、21世紀に入っても常に戦争状態にあるイスラエルでは、そんな父親の疑問や要求も当たり前・・・？ところが、それに対してまともな回答がなかったばかりか、ついにある日「フェルドマンさん、お詫びをしなければなりません。大変な間違いをしてしまいました。」「戦死したのは同姓同名の別人でした。」と告げられたから、アレ・・・。ダフナは息子が生きていた喜びでいっぱいだったが、そんな気分になれなかったミハエルは興奮し、「今すぐ息子を連れ戻すんだ！」「軍は信用できない。」と軍にくっついてかかったが、それは一体なぜ・・・？

## ■□■これも戦争？なるほど！しかし・・・■□■

戦争映画では当然ド派手な戦闘シーンが見モノだが、本作第2部で展開されるヨナタンの国境警備任務の遂行ぶりを見ていると、この仕事はかなり単調で退屈そう。これではやる気が無くなるのは当然だが、そこでラクダをゆっくりと通過させていくという演出は、さすがサミュエル・マオズ監督。ベネチア国際映画祭で金獅子賞、銀獅子賞を受賞しただけのことはあると思わせるあつと驚く演出だ。また、そこでいきなりヨナタンが音楽に合わせて華麗にフォックストロットのステップを踏むシーンも圧巻だ。

しかし、仲間たちと日常的に取り組んでいる任務の遂行ぶりを見ていると、もちろん当人たちは真剣かつ緊張を持ってやっているのだが、はっきり言って退屈そのもので、いい

加減うんざり……。しかし、ある日、嬌声を上げながら車でやってきた若い男女4人のチェックを終え、通過OKとしたものの、ドアに挟まった女性のスカートを直すためドアを開けたはずみで缶ビールの空き缶が外にこぼれ落ちると……。一瞬それを手榴弾と錯覚したからさあ大変だ。

正規軍同士が対峙するのが戦争なら、『ホース・ソルジャー』（18年）で見たように、騎馬兵が戦車の中に突進していくのも現代の1つの戦争。そしてまた、国境警備の任務遂行中に起きるこんな事態も、これまた戦争……。日本は今や何事もコンプライアンス至上主義になっているが、ある日イスラエルの国境で起きたこんな戦争（事故？殺人？過失致死？）に対して、イスラエル軍とイスラエル政府はいかなる対応を？朝日新聞的に言えば、ヨナタン達に対する処罰は当然だが、現実スクリーン上で展開される風景はあっと驚く意外なものだから、それに注目！

## ■□「すぐに帰国させろ！」がいかなる“運命”を？■□

本作はサミュエル監督自身と高校に通っていた長女に起きた現実の事件を基にしているようだ。その事件とは、長女に対してタクシーを使うことを許さず、バスに乗れと命じたところ、折悪しくそのバスがテロリストに襲撃され、何十人も死亡したものの。そのためサミュエル監督は人生で最悪の時間を過ごすことになったが、幸い娘は爆破されたバスに乗り遅れていたため無事で、1時間後に戻ってきたようだ。なるほど、それが「運命は踊る」という本作の邦題の意味だったのか。ちなみに、張藝謀監督の『活きる』（94年）（『シネマ5』111頁）は“人生万事塞翁が馬”の教訓を、大きな感動の中で教えてくれる名作だった。

しかして、本作ではミハエルの「息子をすぐに帰国させろ！」の要求に対して、イスラエル軍と政府が誠実に対応し、直ちに国境警備隊で仕事をしていたヨナタンに対して帰国命令を出したから、それによって万事OK。運命が躍らなければそうなるはずだったが、本作第3部では、なぜかミハエルとダフナが悲しみを共有し合いながら生きている風景が描かれるのでアレレ……。あの国境の事故では、ヨナタンは銃をぶっ放し、加害者の立場になったものの、政府と軍の隠蔽工作(?)によって無罪放免とされたうえ、特別の帰国許可によって両親の下に無事帰ったのではなかったの？第3部のストーリー展開の中で、おおよその事態は読めるが、本作ラストではあのラクダが再登場するとともに、なんとも言えない不条理もしくは運命のいたずらが描き出されるので、それに注目！

## ■□たしかに名作。しかし退屈。日本の若者には理解ムリ？■□

本作は第74回ベネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞した作品だから、ボロクソに評論する人は少ない。しかし、ネット上では「運命は踊るは上質で退屈な映画！感想とラストのネタバレ」というものがあつた。そこに彼は「運命に踊らされるイスラエル人家族を描

いた世にも奇妙な物語。質は高いけど、楽しい映画ではないです。38点(100点満点)」と書いていたが、私も同感だ。たしかに、「運命は踊る」というテーマは面白いし、あっと驚く大きなポイントにもなるほどと思わせるが、なにしろ途中経過が静かでスローテンポな会話劇だから、どうしても退屈になってくる。その点『活きる』は1940年代、50年代、60年代の激動する中国の歴史の中で翻弄される福貴と家珍夫妻そして、その子供たちをドラマティックに描いていたから退屈することは全くなかった。また、その中に登場するギョーザも涙を誘う大きな役割を果たしていた。

本作の基になったのは前述のとおりサミュエル監督の実体験だし、戦争や兵役が日常に沁みついたイスラエルやイスラエルの若者には、本作の「運命は踊る」というタイトルにも「フォックストロット」というステップにも現実感があるだろう。しかし、政治の世界では、憲法改正の議論さえまともな国民的テーマにならず、モリカケ問題ばかりでいたずらに時間を浪費している日本では？また、3K労働は外国人に任せ、自分は安易な“自分探しの旅”を楽しみ、徴兵制はもとより、国の安全保障などこれっぽっちも考えたことのない今の若者が生きる平和な国ニッポンでは？

本作第2部には、国境警備の退屈な任務(?)に従事するヨナタンたち若い兵士の姿が登場してくるが、スクリーン上で語られる彼らイスラエルの若者たちの悩みはもちろん、その会話の意味さえ今の日本の若者には分からないし、全く興味がないのでは・・・？したがってそう考えると、たしかに本作は名作だが、私にとってすら退屈！これでは、とても今の日本の若者達には理解はムリだろう。観客席はチラホラだったが、そのすべての観客は中老年ばかりで若者はゼロ。ああ、やっぱり・・・。

2018(平成30)年10月12日記